

マレー語母語話者の中間言語¹に見られる語用的特徴 - 断り表現における普遍性と特殊性 -

伊藤 恵美子

はじめに

言語教育における中間言語(interlanguage)の研究は、1970年代は学習者の音韻(honology)・形態(morphology)・統語(syntax)の各側面、つまり学習者の言語知識に対して関心が主に向けられていた。Hymes(1972)がコミュニケーション能力(communicative competence)の概念を提唱すると、この概念は第二言語習得研究に取り入れられ、中間言語の守備範囲は学習者の語用的知識にまで広がった。この新しい分野は、「中間言語語用論」(Interlanguage Pragmatics)と呼ばれている(Blum-ulka, House, & Kasper, 1989)。中間言語語用論は、学習者が第二言語²でコミュニケーションを図る際に見られる社会文化的規範(socio-cultural norm)に注目する。二言語の使用に影響を与える母語からの社会文化的規範の転移を、プラグマティック・トランスファー(pragmatic transfer)³と呼ぶが、第二言語の社会・文化切り離された状況で言語習得が行われた場合、負のトランスファーは大きい。ぜなら、人は自分の文化的期待に添って行動するからである(シタラム, 1985

¹ Selinker(1972)が初めに提唱した仮説である。学習者が目標言語、つまり学習している言語を習得する過程で内在的に構造化される体系であり、目標言語に向かって発達していく動的な言語体系であるとされている。

² 本稿の場合、日本在住の留学生が使う日本語が第二言語であり、マレーシア在住の大学生が使う日本語が外国語である。

³ Takahashi & Beebe(1987: 134)では、以下のように定義されている。

Pragmatic transfer is defined here as transfer of first language (L1) sociocultural communicative competence in performing L2 speech acts.

プラグマティック・トランスファーは、正のトランスファーと負のトランスファーに大別できるが、前者はコミュニケーションが成功した結果なので、本稿では議論しない。

伊藤 恵美子

)。

本稿の先行研究としては、比較文化語用論(cross-cultural pragmatics)では異なる言語社会に見られる言語使用の違いを調査して、先駆的な研究とされているBlum-Kulka & Olshtain(1984)が挙げられる。中間言語語用論の断り行為の研究では、日本人英語学習者を対象としたTakahashi & Beebe(1987)、および Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz(1990)、アメリカ人日本語学習者を対象とした生駒・志村(1993)、韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者を対象とした藤森(1994)などがある。

これらの先行研究では回答欄に断り行為を書くように誘導している節が窺われ「断りをしない」という選択を回答者に与えていない。回答欄の下にリジョインダー(rejoinder)⁴を付けたり、「断りの調査」と明記して調査目的が回答者にわかるようになったりしている。これは、調査者が回答者を誘導していることに他ならなく、方法論の観点から筆者には疑問に感じられるので、本稿ではこの点を改めることにする。

ここで、本稿がマレー語母語話者を対象にした理由を三点述べる。

第一の理由は、中国語や朝鮮(韓国)語に関しては語用的な研究もなされているのに対して、東南アジアの言語に関してはまだ語彙や統語の対照研究の域にあり、マレー語母語話者の中間言語を発話行為の観点から進めた研究は、調査を計画した1999年3月の時点では、過去に一例も見当たらなかった⁵からである。管見によれば、東南アジアの言語を語用論の枠組みで研究したものは、日本語母語話者とマレー語母語話者を心理的負担の度合で比較した伊藤(2001a)と、マレー語を母語とする日本語学習者の語用的能力を滞日期間で比較した伊藤(2002)に限られる。第二の理由は、マレー語を母語とする留学生とそのチューターに対して行った面接調査(伊藤, 2001b)の結果を、調査紙調査で国立高等専門学校に在籍している留学

⁴ 次のDCT(Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz, 1990 : 71)では、Friendの2回目のことばがリジョインダーである。

A friend invites you to dinner, but you really can't stand this friend's husband / wife.

Friend: How about coming over for dinner Sunday night? We're having a small dinner party.

You: _____

Friend: O.K., maybe another time.

⁵ 国立国語研究所の「日本語研究文献目録データアーカイブ」を検索した。アドレスは、次のとおりである。http://www2.kokken.go.jp/kokusai1/readme.html

生の全数調査と比較したいと考えたからである。第三の理由は、調査対象者の母語・文化・宗教・学力・専攻分野などの個人的な要因に関して、均質性の確保を企図したからである。マレーシア政府が日本に派遣する留学生は、当該政府の政策⁶上、留学生の背景は比較的均質であることに加えて、高等専門学校は寮生活が基本なので来日後の生活環境も比較的似通っていると考えられる。

2. 本稿の立脚点と分析の枠組み

2.1 理論的背景

本稿は、Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論(politeness theory)に則って調査を計画した。ポライトネス⁷は「丁寧さ」と訳される場合もあるが、敬語より広い社会的な概念と言えよう。端的に言えば対人関係における調節機能であり、体系としての敬語の有無に関わらず人間の言語行動における普遍性を具えている(生田、1997)。ポライトネス理論を説明する際によく使われる用語にFTA (Face Threatening Acts)がある。人間には、他人に理解や称賛をされたいポジティブ・フェイス⁸と、他人に邪魔されたくないネガティブ・フェイスの二つのフェイスを保ちたい欲求があり、このフェイスを脅かすような行為をFTAと呼ぶ。FTAは、話し手と聞き手の社会的距離と、話し手と聞き手の力関係と、相手にかかる負担の度合の和で表され、負担の度合は文化によって異なるとされている。

⁶ マレーシア政府はルック・イースト政策(Look East Policy: 1981年に首相に就任したMahathir b. M. が、マレーシアを近代国家へ発展させるために日本や韓国などマレーシアの「東」にある国々に学ぼうと提唱した政策)を施行している(マハティール、1995)。この政策の具体的な事業計画の一つに、日本の大学教育を受けることが掲げられており、高等学校卒業試験で優秀な成績を修めた学生は、主に「学部学生派遣プログラム」と「高等専門学校派遣プログラム」で日本の教育機関に派遣されている。

⁷ Brown & Levinson(1987)に基づく概念は、最近では片仮名で表記されているので、本稿もそれに倣う。

⁸ positive は「積極的」、negative は「消極的」と訳されることがある(たとえば『外国語教育学大辞典』1999)が、訳語のニュアンスが定義された意味を不明確にしている場合もあるので、本稿では片仮名表記にする。同様に、faceも本稿では片仮名表記にする。

伊藤 恵美子

2.2 研究目的

本稿の研究目的は、上述のポライトネス理論を踏まえて、話し手と聞き手の社会的距離を「親疎関係」として、話し手と聞き手の力関係を「地位」として、相手にかかる負担の度合を日本語母語話者・マレー語母語話者・学習者4グループ(来日3年目の学習者・来日2年目の学習者・来日1年目の学習者・滞日経験のない学習者)の「グループ」間の文化差で比較することである。

本稿は、前提発話行為を勧誘行為に限っているので、勧誘行為に対する断り行為を分析していく。よって、調査紙の場面設定のうち該当する場面に関してのみ言及する。場面設定は表1のとおりである。Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz(1990)などでは職場の場面が数例設定されているが、これらの状況は学生にとって現実的ではないので、本稿では留学生の意見を参考にして、マレーシアで男女の別なく日常的に行われている状況に改めることにした。場面3と場面4は、日本語版では「トランプに誘われる」で、マレー語版では「散歩に誘われる」である。

表1 場面設定

場面	対話の相手	状況
1	担任の先生	パーティに誘われる
2	担当以外の先生	パーティに誘われる
3	親しい友達	トランプ / 散歩に誘われる
4	親しくない学生	トランプ / 散歩に誘われる

3. 調査

3.1 ロールプレイとフォローアップ・インタビュー

3.1.1 調査対象者

調査対象者は、日本の大学(学部)に進学が決定しているマレーシア政府派遣留学生7名であり、来日前にマレーシアで日本語の予備教育を2年間受けている。

伊藤 恵美子

3.1.2 調査時期

調査時期は1999年3月下旬である。

3.1.3 実施方法

八王子市の大学セミナーハウスで来日後の研修を受けている留学生に対して、筆者がロールプレイとフォローアップ・インタビューを、日本語で実施した。

3.1.4 手続き

調査対象者に場面を設定したカードを渡し、場面状況を把握したことを確認してから、筆者と1対1でロールプレイを行った。その後フォローアップ・インタビューを実施した。ロールプレイとフォローアップ・インタビューの内容はテープに録音した。

3.2 調査紙調査

3.2.1 調査対象者

調査は、日本国内とマレーシアで実施した。国内の調査対象者は、社会人⁹の日本語母語話者(以下JJと略す)¹⁰と、マレー語を母語とする来日3年目の日本語学習

⁹ 東京・名古屋・大阪市内およびその近郊に在住している20歳代後半から50歳の有職社会人で、主婦は対象から除外している。男性17名、女性35名の合計52名であるが、本稿では性別は考慮に入れていない。大学生を基準データとする先行研究が多いが、本稿は日本語の社会文化的規範を会得している社会人から基準データを採った。JJが社会人を、MMからMJ3までが学生を調査対象としたことで、筆者の主張に矛盾があると思われる向きがあるかもしれないが、本稿は日本に留学している外国人学生と日本人とのコミュニケーション問題を考察するスタンスに立つ。語用的誤り(pragmatic failure)は、語用言語的誤り(pragmalinguistic failure)と、社会語用的誤り(sociopragmatic failure)に分けられる(Thomas, 1983)が、本稿が議論している問題は後者である。語用的能力(pragmatic competence)は、社会化(socialization)の程度に応じて向上するので、一般的に大学生の語用的能力は発達段階にあると見なされている。心理学の発達理論では、成熟度は年齢差に反映され、社会的経験の違いは就労経験に反映されるので、年齢と就労経験は文化理解に影響を与える要因とされている(玉岡, 1997)。そこで語用的能力を議論する本稿は、JJのデータを大学生ではなく、仕事に就いている社会人から収集することにした。

者(以下MJ3と略す)、来日2年目の学習者(以下MJ2と略す)、来日1年目の学習者(以下MJ1と略す)である。マレーシアでの調査対象者は、滞日経験のない日本語学習者(以下MJ0と略す)とマレー語母語話者(以下MMと略す)¹¹である。有効回答数¹²を表2に示す。

表2 有効回答の内訳

対象者	母語	使用言語	調査国	回答数
JJ	日本語	日本語	日本	52
MJ3	マレー語	日本語	日本	48
MJ2	マレー語	日本語	日本	49
MJ1	マレー語	日本語	日本	44
MJ0	マレー語	日本語	マレーシア	80
MM	マレー語	マレー語	マレーシア	68

¹⁰ 先行研究では、調査者の所属先の教育機関から学習者のデータを収集しているものが大半を占めているが、筆者には母集団からの抽出方法に疑問が感じられた。そこで、先行研究で行われているデータ収集の方法を改め、本稿は留学生の全数調査を計画して国立高等専門学校に在籍している留学生全員のデータを全国から集めた。より厳密な調査・分析を行おうとするなら、日本語母語話者のベースデータも全国から無作為抽出で採らなければならないだろうが、そのような大掛かりな調査は一個人の力で実施できる範囲を超えている。また、中間言語語用論は、調査対象者の下位的な属性に強い関心を示す分野ではなく、学習者の学習言語におけるコミュニケーション上の障害を探ることに主眼を置き、学習言語の実態を解明することに貢献する分野である。以上の諸点を勘案して、本稿は、中間言語語用論で踏襲されている母語話者の枠組みに基づいてベースデータを収集した。

¹¹ 生育地はマレーシア全土に渡る。年齢は18歳、男性29名、女性39名の合計68名である。

¹² マレーシアはマレー系・インド系・華人から成る多民族国家であることを鑑みて、本稿は分析の対象をマレー系マレーシア人、その中でも自然科学を専攻するイスラームのマレー語母語話者に限定している。本稿では宗教もコントロールしているので、東マレーシア(ボルネオ島)出身の先住民系のキリスト教徒は有効回答に入れていない。

伊藤 恵美子

3.2.2 調査期間

調査期間は、国内では1999年7月から10月にかけて、マレーシアでは同年8月から9月にかけてである。

3.2.3 実施方法

調査は調査紙を用いて実施した。JJに関しては、日本語版の調査紙を郵便と電子メールで配布・回収をした。MJ3・MJ2・MJ1に関しては、全国の国立高等専門学校に日本語版の調査紙を郵送して協力をお願いした。MJ0とMMに関しては、筆者がマラヤ大学を訪問して、日本留学予備教育課程日本語学科¹³に調査を依頼した。1・2年次の在籍者111名全員を対象に、担任の先生がクラス時間内に調査紙を配布・記入・回収をした。2年生¹⁴にはMJ0として日本語版の、1年生¹⁵にはMMとしてマレー語版の調査紙で実施した。

3.2.4 手続き

調査紙は談話完成テスト(Discourse Completion Test: DCT)¹⁶とフェイス・シート

¹³ 正式名称は Ambang Asuhan Jepun, Pusat Asasi Sains, Universiti Malaya である。マレーシアにおける日本留学の予備教育は「学部学生派遣プログラム」はマラヤ大学で、「高等専門学校派遣プログラム」はマレーシア工科大学で行われている。MJ3・MJ2・MJ1のデータは全国の国立高等専門学校の留学生から収集したが、「高等専門学校派遣プログラム」は1998年の入学者で終了予定となっていて、1999年調査時にマレーシア工科大学には1年次の学生は在籍していなかった。そこで、MJ0・MMのデータはマラヤ大学の日本留学予備教育課程1・2年次の学生から収集した。

¹⁴ マラヤ大学は1998年の入学生から自然科学系のみになり、主教材は東京外国語大学の『初級日本語』と研究社の『テーマ別中級からの日本語』である(飯塚, 1999)。マレーシア工科大学では、主教材は東京外国語大学の『初級日本語』と『中級日本語』である。調査時期は、マラヤ大学ではまだ中級のテキストを使いはじめたばかりであり、『テーマ別中級からの日本語』が2年次の学生に与える影響は調査計画を変更する必要があるほど大きいものではないと判断した。

¹⁵ コースは6月から開始する。調査はセメスター の中間試験終了後に実施したので、学生が受ける日本語・日本文化の影響は看過しても支障は出ない程度であると考えられる。

¹⁶ DCTはロールプレイを文字で書き表したものであり、話ことばのありのままの姿である自然発話に比べれば二重の不自然さがあるものの、遠隔地のデータを多量に収集することに

から成る。DCTは場面設定と会話の相手の台詞と、その台詞に対する応えを書き入れる空白欄で構成されている。DCTの例を [例1] に示す。

[例1] 担任の先生がパーティに招待してくださいました。しかし、その日は友達の結婚式に出席します。

先生： 今週の土曜日に私の家でパーティをするので、よかったら来ませんか。

私： _____

3.2.5 分析方法

まずマレー語版のDCTは、マレー語を母語とする留学生2名の意見を参考にし、和訳した。次に発話内容の分析は、DCTで得られた発話から意味公式 (semantic formulas)¹⁷ を抽出した後、その意味公式を機能別に分類¹⁸ した。表3が意味公式の一覧表である。なお、意味公式は { } と表示する。

[例2] 担任の先生がパーティに招待してくださいました。しかし、その日は友達の結婚式に出席します。

先生： 今週の土曜日にパーティをするのでよかったら来ませんか。

私： すみません。今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければならなくて、本当にすみません。

[例2] に示したように、「すみません。今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければならなくて、本当にすみません。」が、調査対象者の回答である。「すみません」が {詫び}、「今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければ

において、これに勝る方法はない。DCTで測定できない側面を補うために、本稿ではフォローアップ・インタビューの結果も考察に用いている。

¹⁷ Blum-Kulka & Olshtain(1984)、Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz(1990)、生駒・志村(1993)、藤森(1994)などで会話を分析するのに用いられている単位である。

¹⁸ 本稿では断り行為を分析したBeebeら(1990)の分類を日本語の分類に資するように修正した藤森(1994)の分類を採るが、一部改めて、{結論} {理由} {詫び} {関係維持} {共感} {感謝} {情報} {条件} {承諾} {その他} に分類した。意味公式の分類は筆者と協力者の2名で行い、コーディングの一致度は87.4%であった。コーディングが一致しなかったケースについては、両者の判断基準を出し合って、妥当性の高い基準のほうを採用した。

伊藤 恵美子

「ならなくて」が{理由}、「本当にすみません」が{詫び}の意味機能を担っているので、回答は{詫び}{理由}{詫び}の3つに分けられる。

表3 意味公式の分類

意味公式	意味機能	例
{結論}	直接的な表現の断り	行けない無理です/できない
{理由}	相手の意向に添えない旨の表明	友達の結婚式に出ますから
{詫び}	相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明	申し訳ありません/ごめんね/ 勘弁しておこらないで
{関係維持}	相手との関係を維持したい旨の消極的な働きかけ	次回は行きます/また今度ね/ 次は出席します
{共感}	相手の意向に添いたい心情の表明	行きたいけど残念ですが/ したくないことはないけど
{感謝}	相手の行為により恩恵を受けたことの表明	ありがとうございます/ ありがたいんですが
{情報}	相手の発話内容を確認	今週の土曜日ですか/ 何時から?/明日まで?
{条件}	断りの担保	レポートを書いてから/ 時間があれば/約束はしないけど
{承諾}	明確な承諾	行きます/やります/わかりました
{その他}	上記に該当しないもの	ちょっと.../あいう.../えーと

4. 結果と考察

意味公式の順序の観点から、勧誘行為に対する応えを断り行為を中心に考察する。断り表現を構成する意味公式が、学習者の母語のマレー語と目標言語の日本語とでどう違うか、また学習者の日本語にその違いがどう反映されるかを分析するために、場面別、すなわち地位の上下と親疎関係の社会変数別にその異同を見ていく。

ポライトネス理論によれば、断り行為は対話の相手にとってFTAとなり得る。したがって断り行為を実現するに際しては、様々なストラテジーを伴うことになる。たとえば相手の意に添えない場合、話の最後をどう結ぶかを苦慮することが多々ある。それは最後の一言によって今後の相手との人間関係が決定されることがあり、十分な配慮が必要だからである。そこで先行研究が採っている分析方法、つまり、応答の順序の分析とともに、本稿では一連の応答の最後に来る意味公式にも注目することにする。以下、場面ごとに、グループ別で最も頻度の高い応答の順序とその割合、応答の最後に来る意味公式で一番多く見られたものとその割合¹⁹を、表3から表6に示す。

まず、《場面1》《場面2》《場面3》《場面4》の全場面を概観すると、どのグループも応答の順序の第一に{詫び}が、第二に{理由}が来るパターンが共通して顕著に見られる。マレー語母語話者の日本語には、Takahashi & Beebe(1987)や藤森(1994)などで指摘されているような重大なプラグマティック・トランスファーつまり発話の最初に来る意味公式がJJと異なるケースは皆無であった。藤森(1994)によれば、中国人日本語学習者の断り行為は、親しい相手に対する応答が{詫び}で始まり{理由}で始まり、Takahashi & Beebe(1987)によれば、アメリカ人英語母語話者の断り行為は目上の相手に対する応答が{感謝}で始まるのに対して、日本人英語学習者の応答は{共感}で始まる。

次に、《場面1》《場面2》に共通する点として、応答の最後に来る意味公式はすべてのグループで{理由}であった。したがって、目上の相手に対する話の終え方に関しては、コミュニケーション障害の原因にならないだろう。MMもJJもともに{理由}で話を終えているので、学習者が使用した{理由}が、母語の社会文化的規範の影響を受けたものか、目標言語の社会文化的規範を獲得した結果か、本稿のデータからは判断が難しい。

さらに、場面別に見られる発話の特徴を明らかにしていく。

表4で示されているように、目上の親しい相手に対する場合、JJの応答の順序の最頻出パターンは{詫び}{理由}{結論}であり、{結論}で発話を結ぶ傾向が

¹⁹ 応答の順序には10%にも満たない組み合わせがあり、そのような小さい割合の組み合わせを分析する意味が果たしてあるのかという疑問が出されるかもしれないが、第一に先行研究で使われている分析方法であること、第二にマレー語母語話者の中間言語を意味公式の概念を用いて記述した先行研究が一例もなかったことから、分析結果の記述自体に意味があるのではないかと考える。

伊藤 恵美子

見られるが、MMの応答の順序の最頻出パターンは{詫び}{理由}であり、{結論}を付加する傾向は見られない。また、MJ1・MJ2・MJ3には{理由}を重ねる傾向が見られる。

表4 目上の親しい相手《場面1》

グループ	応答の順序	割合(%)	応答の最後	割合(%)
JJ	{詫び}{理由}{結論}	11.5	{理由}	25.0
MJ3	{詫び}{理由}{理由}	8.3	{理由}	43.8
MJ2	{詫び}{理由}{理由}	4.1	{理由}	24.5
MJ1	{詫び}{理由}{理由}	11.4	{理由}	31.8
MJ0	{詫び}{理由}{結論}	5.0	{理由}	17.5
MM	{詫び}{理由}	14.7	{理由}	26.4

表5 目上の疎遠な相手《場面2》

グループ	応答の順序	割合(%)	応答の最後	割合(%)
JJ	{詫び}{理由}	17.3	{理由}	28.8
MJ3	{詫び}{理由}{理由}	12.5	{理由}	41.7
MJ2	{詫び}{理由}{結論}	20.4	{理由}	30.6
MJ1	{詫び}{理由}{理由}	13.7	{理由}	43.2
MJ0	{詫び}{理由}{結論}	10.0	{理由}	37.5
MM	{詫び}{理由}	11.8	{理由}	27.9

表5からわかるように、目上の疎遠な相手に対する場合、応答の順序のパターンも応答の最後に来る意味公式もJJとMMは同じなので、母語からのプラグマティック・トランスファーは問題とならないだろう。ただし、MJ1とMJ3は{理由}を、MJ0とMJ2は{結論}を発話の最後に付け加える傾向が見られる。この

ように目上の相手に対する場合、学習者グループに共通してMMより意味公式がひとつ多い傾向が見られるのは、なぜだろうか。

Blum-Kulka & Olshtain(1986)によれば、目標言語の母語話者より学習者の言語が冗長になるのは、学習者に自分の意図が伝わる自信がないためにどうしても伝えたいと強く思うからであり、冗長は、発話行為の意図を理解できる文法的知識 (linguistic knowledge)はあるが、コミュニケーションがうまくできるかどうか不安を感じている上級学習者に見られる現象²⁰である。つまり学習者は命題内容を相手に伝えることができるレベルには達しているが、母語話者のように社会的状況に合致した的確な表現で話すことができるレベルには達していないために、冗長になってしまうと考えられる。学習者の冗長な日本語は、語用的能力の不足が招いた結果であると言い換えられよう。

表6 同等の親しい相手《場面3》

グループ	応答の順序	割合 (%)	応答の最後	割合 (%)
JJ	{詫び}{理由}{関係維持}	11.5	{関係維持}	38.5
MJ3	{詫び}{理由}{理由}	25.0	{理由}	50.0
MJ2	{詫び}{理由}{理由}	24.5	{理由}	49.0
MJ1	{詫び}{理由}{理由}	11.4	{理由}	38.6
MJ0	{詫び}{理由}{理由}	6.3	{理由}	37.5
MM	{詫び}{理由}{理由}{関係維持}	22.1	{関係維持}	52.9

表4・表5で見たように、目上の相手に対する場合、応答の最後に来る意味公式は全グループで{理由}が多かったが、同等の相手に対する場合、表6・表7で示されているように、JJは親疎関係に関わりなく{関係維持}の占める割合が高く4割前後に上る。表6からわかることは、同等の親しい相手に対する場合、MMの応答の最後にも{関係維持}が来るので、正のトランスファーが起こるだろうと推

²⁰ これは the waffle phenomenon と呼ばれる中間言語に見られる現象であり、学習者の母語からの影響ではなく、目標言語の母語話者のように状況に応じた定型表現が上手に使えないために学習者に不安が生じ、その不安を解消しようとして採る補償的な方略である (Edmondson & House, 1991)と言われている。

伊藤 恵美子

測されるが、MJ0・MJ1・MJ2・MJ3の学習者グループには応答の順序にも応答の最後にも{関係維持}は頻出してない。言い換えれば、学習者グループは対人関係の不均衡を是正する処置を行っていないので、学習者の言語行動は日本人と友人関係を築く際の障害となりかねない危険性ははらんでいると指摘できる。

では、どうして学習者グループには{関係維持}で発話を終わらせる傾向が高くないのか。母語でなら50%を超える割合で{関係維持}で発話を終わらせていることから、母語話者であれば当然知っていて使う表現を、学習者が日本語の表現として使いこなすレベルにまで達していないのではないだろうか。

学習者の日本語は、目上の相手に対する場合は冗長性が認められるのに対して、同等の相手に対する場合はことば足らずに終わっている。つまり、意味公式の数は、対話の相手の地位が高い場合は多くなり、対話の相手の地位が低い場合は少なくなる。この二律背反的な現象は表層的には相容れないように見えるが、いずれも語用的な能力が不足していることから生じた現象であるという解釈はいかがだろう。対話の相手の地位が高い場合、学習者は日本の社会的状況に合致した的確な表現を選択することができるレベルには達していないために、相手に失礼にならないように説明を重ねるので冗長な日本語になってしまい、対話の相手の地位が低い場合、学習者は相手との心理的な距離を正確に測れなくて{関係維持}で発話を終わらせることができない、と考えることに確証はないが蓋然性は認められるのではないか。

表7 同等の疎遠な相手《場面4》

グループ	応答の順序	割合(%)	応答の最後	割合(%)
JJ	{詫び}{理由}{関係維持}	13.5	{関係維持}	40.4
MJ3	{詫び}{理由}{理由}	12.5	{理由}	39.6
MJ2	{詫び}{理由}	12.2	{理由}	32.7
MJ1	{詫び}{理由}	15.9	{理由}	36.4
MJ0	{詫び}{理由}{結論}	10.0	{理由}	26.3
MM	{詫び}{理由}{理由}	23.5	{理由}	42.6

表6と表7を比べて顕著なことは、JJは同等であれば疎遠な相手に対しても{関

係維持}で会話を終わらせる傾向があるのに対して、MMは{理由}で終わる傾向があることである。MJ0・MJ1・MJ2・MJ3も{理由}で会話を終了しているので、これは母語からのプラグマティック・トランスファーであろう。

まとめとして、4場面を包括的に考察する。JJは地位の上下・人間関係の親疎に関わらず、意味公式の冒頭の部分は{詫び}{理由}の順であった。MMも上下関係・親疎関係のいずれの社会的変数においても、まず{詫び}を次に{理由}を言うパターンが最頻出發話の連続であった。したがってマレー語を母語とする日本語学習者の勧誘に対する断り行為において、発話の出出しの順序に関しては重大なプラグマティック・トランスファーが起こることは考えにくい。

ではマレー語母語話者が日本語を使う場合にコミュニケーション障害は起こらないのだろうか。藤森(1994)で言及されているように、本調査でもJJは親しい相手(表6)だけでなく親しくない相手(表7)にまでも{関係維持}を使う傾向が見られた。このような日本人のことは使いは、心が伴わない決まり文句であり日本語の特徴であると、ポン(1990)にあるが、儀礼的な表現は日本語に限らず、どんな言語にも存在しよう。ただ、儀礼化の様相は個別文化に左右され、一様を呈さないだけである。それでは、マレー語において{関係維持}は実質的機能を担っているのだろうか。それとも儀礼的色彩を帯びているのだろうか。マレー語母語話者が{関係維持}をする時どのような意識が働いているかを確かめるために、ロールプレイで{関係維持}を使用した回答者にフォローアップ・インタビューをした。インタビューの応えによると、マレー系マレーシア人にとって{関係維持}は日常的なことのようで、「本当に次の機会を考えている」とか「埋め合わせをする気持ちがある」と異口同音に返ってきた。MMは親しい相手に対しては{関係維持}を使っている(表6)が、疎遠な相手に対しては{関係維持}を使う傾向が見られなかった(表7)ので、マレー文化においては儀礼化の程度は低いと考えられる。このようなJJとMMの{関係維持}の使い方の違いから、マレー語を母語とする学習者が日本語の決まり文句を自文化の枠組みで解釈して実質的な意味に捉えてしまうことがコミュニケーションギャップの一因になると察するに難くない。つまり、発話連続において意味公式の一番目と二番目が目標言語の最頻出パターンで選択されても、発話の最後で選ばれる意味公式の社会文化的規範に母語と目標言語で差があるとすれば、意志の齟齬を来す恐れがあると言えるだろう。

5. まとめと中間言語語用論への提言

本稿は意味公式の概念を援用して、マレー語母語話者の中間言語に見られる特徴を、マレー語と日本語とで比較した。意味公式の応答の順序の最頻出パターンに関しては、JJ・MMおよび学習者のすべてのグループで意味公式は{詫び}{理由}の順で出現した。Takahashi & Beebe(1987)や藤森(1994)と異なり、マレー語母語話者の応えに出現した意味公式は、日本語母語話者の応えに現れた意味公式との違いが著しく見られなかった。応答の最後で最もよく使われた意味公式に関しては、目上の相手に対しては全グループが{理由}であった。他方、同等の相手に対しては、JJは親疎関係に関わらず{関係維持}で話を終了させているが、MMは親しい相手に対してしか{関係維持}を使っていない。フォローアップ・インタビューの結果、日本とマレー双方の文化における儀礼化の違いが浮き彫りとなった。また、マレー語を母語とする学習者の日本語が冗長なのは、学習者の語用的能力が低いために起こる現象、いわゆるthe waffle phenomenonであり、中間言語に見られる一般的な現象であることも見出された。

上記のように、マレー語を母語とする日本語学習者の中間言語には普遍性と特殊性が認められた。学習者の母語に関係なく広く観察できると言われている冗長性は、前者に相当し、対人関係の修復に使われる言語表現の儀礼化の程度が日本語とマレー語で異なることから生じるプラグマティック・トランスファーは、後者に相当する。中間言語語用論ではプラグマティック・トランスファーが主要な研究テーマとなっているが、今後はユニバーサルな側面にもっと目を向ける必要があるだろう。なぜなら、語用的能力の全容を究明するには、特殊性の分析だけでは不可能だからである。

本稿において解明したことは必ずしも多くはないが、発話行為の視点から中間言語の記述に若干なりとも寄与できたと考える。

参考文献

- 飯塚達雄(1999) 『マレーシアにおける日本語予備教育』国際交流基金日本語センター
- 生田少子(1997) 「ポライトネスの理論」『言語』26-6, 66-71
- 生駒知子・志村明彦(1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79, 41-52. 日本語教育学会
- 伊藤恵美子(2001a) 「ポライトネス理論の実証的考察：心理的負担の度合を中心に意味公式の数値の観点から」『日本語教育論集』17, 1-20. 国立国語研究所日本語教育センター
- 伊藤恵美子(2001b) 「マレーシア政府派遣留学生の対人コミュニケーション障害：言語行動を面接から分析して」『異文化コミュニケーション研究』4, 57-70. 愛知淑徳大学
- 伊藤恵美子(2002) 「マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について：勧誘に対する『断り』行為に見られる工学系ブミプトラのポライトネス」『日本語教育』115, 61-70. 日本語教育学会
- シタラム K.S. 御堂岡潔(訳)(1985) 『異文化間コミュニケーション：欧米中心主義からの脱却』東京創元社(Sitaram, K. S., & Cogdell, R. T. 1976 *Foundations of intercultural communication*. Columbus: Charles E. Merrill Publishing Company.)
- ジョンソンK・ジョンソンH. 岡秀夫(監訳)(1999) 『外国語教育学大辞典』大修館書店(Johnson, K., & Johnson, H. 1998 *Encyclopedic dictionary of applied linguistics*. Oxford: Blackwell Publishers.)
- 玉岡賀津雄(1997) 「グループ間およびグループ内分析のためのサンプル諸特性記述」江淵一公(編著) 『日本語の習得と文化理解(財)国際文化フォーラム委託研究報告書』13-24. 異文化間教育学会
- 藤森弘子(1994) 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー：『断り』行為の場合」『名古屋学院大学日本語・日本語教育論集』1, 1-19.
- ポン フェイ(1990) 『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』和泉書院

- マハティール b. M. (1995) 「私の履歴書」『日本経済新聞』日本経済新聞社
- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In Scarcella, R. C., Andersen E. S., & Krashen S. D. (Eds.), *Developing communicative competence in a second language*. Pp. 55-73. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Blum-Kulka, S., House, J. & Kasper, G. (1989) Investigating cross-cultural pragmatics: An introductory overview. In Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (Eds.), *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies*. Pp. 1-34. Norwood, NJ: Ablex.
- Blum-Kulka, S., & Olshtain, E. (1984) Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5, 196-213.
- Blum-Kulka, S., & Olshtain, E. (1986) Too many words: Length of utterance and pragmatics failure. *Studies in Second Language Acquisition*, 8, 165-180.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Edmondson, W., & House, J. (1991) Do learners talk too much? The waffle phenomenon in interlanguage pragmatics. In Phillipson, R., Kellerman, E., Selinker, L., Smith, M. S., & Swain, M. (Eds.), *Foreign/second language pedagogy research: A commemorative volume for Claus Fæch*. Pp. 273-287. Clevedon, Avon: Multilingual Matters.
- Hymes, D. (1972) On communicative competence. In Pride, J. B., & Holmes, J. (Eds.) *Sociolinguistics: Selected readings*. Pp. 269-293. Harmondsworth: Penguin.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-231.
- Takahashi, T., & Beebe, L. M. (1987) The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. *JALT Journal*, 8, 131-155.
- Thomas, J. (1983) Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4, 91-112.

マレー語母語話者の中間言語に見られる語用的特徴